

<講演> 演題「ヴァイオリンと共に歩む」

講師 川畠成道 氏

皆さんおはようございます。ただいまご紹介いただきました川畠成道と申します。非常に詳しく私のことをお調べいただき、お話いただきました。従って、改めてこれ以上何をお話するのかということも多少感じつつ、お話させていただきたいことを、ほぼほぼ網羅していただきましたので、話がどうしてもかぶってしまう所も出てくるかと思いますが、どうぞその辺りはご容赦いただきまして、耳を傾けていただけたらと思っております。

本日は、幼児教育についてということをお伺っております。個人的には私も今、ちょうど明日5歳になる息子が1人おります。今、年中組なので、非常に、その辺りの幼児教育につきましても、個人的にも興味があります。ただ、先ほどご紹介いただきました通り、私は幼児教育については全くの素人ですし、特に何の知識も持っているわけでもありません。ですので、今日こうして皆さんの前に何をお話させていただくのかということも非常に悩ましい所ではあるのですが、私がこれまで生きてきた道のりについて、多少なりともお話をさせていただければと思っております。

先ほどもご紹介いただきました通り、ヴァイオリンを弾いております。ヴァイオリニストとして、通常は今日のようなホールで自分の演奏を聴いていただく、これが私にとっての仕事であり、演奏してただ単に仕事ということではなく、子どもの時から続けてきた事が、それがそのまま仕事として結びついているという形になっています。一般の方にとりましては、何かの専門職ではない限りは、小さい時から続けてきたことがそのまま仕事として成り立つ、結びついていくということは少ないのかなというふうにも思いますので、よくよく考えてみますと、それはある意味恵まれているということなのかもしれません。ただ、そこまでやってくる道のりというのは、決して楽なものではなかった。今振り返っても、色々数多く思い起こされることがあります。

子ども時代のことに話を戻したいと思っておりますけれども、私は幼稚園、それから小学校にあがる頃というのは、現在とは違って視力が普通にあって、家の息子なんかもそうですけれども、普通に外で遊ぶ、という子ども時代を過ごしておりました。その年齢ですから、将来自分がどのような道を、人生を歩んでいくのかとか、どのような仕事に就くのかとか、そういったことは勿論考えることもなく、日々楽しく過ごしていた子ども時代だったかなというふうに思います。それが小学校3年の夏休みに、アメリカを旅行中に病気にかかってしまった。その時に風邪をひいたのですけれども、その時に与えられた風邪薬の副作用とも聞いておりますが、当時生存率5%と言われる難病にかかってしまいました。幸いにして、3カ月間のロサンゼルスでの入院生活を経て、病気の方は回復したのですけれども、視力に後遺症が残ってしまいまして、そちらのほうは今もそのまま続いている状態です。

ですから、皆さんの前でお話しさせていただいておりますけれども、完全に全盲ということではないのです。物の形をはっきりと見分けるというのが難しいという、例えていうならば、非常に分厚いすりガラスを通して、物を見ている状態に近いのではないかなと思います。少し話が逸れてしまいますけれども、私、文部科学省のスペシャルサポート大使という役目をいただいております。そこで障がい者と健常者の垣根を取り払っ

ていこうという活動をさせていただいております。私も自分の演奏活動を通して感じることですけども、視覚障がいというと、皆さんは全盲という状態を思い浮かべられる。私の場合は、おそらく弱視という状態になるのではないかと思いますけれども、なかなかその状態をご理解いただくというのが難しいようで、普通に見えるかあるいは全く見えない、いわゆる全盲という状態を皆さんは想像される。視覚障がいにも色々な段階があるということをなかなかご理解いただけない時があるので、一応この場をお借りしまして、皆さんにお伝えさせていただきました。

話を戻したいと思います。病気の後遺症として私は視力を悪くしてしまいました。そして3カ月ほどのアメリカ滞在を経て、日本に帰国しました。アメリカ旅行を境に、自分の人生、そして自分の環境が、全く違うものになってしまったということ。まず、家庭の空気というものが非常に重たいものになってしまった。それは自分自身も勿論ですけども、それ以上に、私の両親、そして私をアメリカ旅行に連れて行った祖父母は大きな心の負担といたしますか、そうしたものを背負ってしまうことになったと思います。非常に重い家の中の空気、日本に帰国してからの病院通いが続き、そうした日々の忙しさに追われるといった状態が続きました。約1年程続いたかなと思います。勿論その間には学校に通うことも難しく、学校の先生が、家に勉強を教えに来てくださったりということもあったのですが、将来どのように生きていくのかとか、そうしたところまで考えが及ぶことはなかった。それだけの、考えを巡らすというゆとりは無かったように思います。そうした状態が1年、1年半くらい続いたでしょう。いつまでもこれではいけないという気持ちが自然と、私というよりは私の両親の心の中に芽生えてきたと思います。将来に向けて、何か希望がもてる物はないか、あるいは日々の生活の中で目標となるものはないか。そうしたことを両親が中心となって考えてくれました。先ほどご紹介いただいた将棋をやっていたということもありました。確かにやっていたのですけれども、大人を相手に子どもの頃からやっていて、多少強かったみたいですね。なので、両親はそちらの道に進ませるということも考えたようですが、たまたま通える範囲に教えてくださる先生がいらっしゃらなかったということがあって、父親がやっていたヴァイオリンを手にすることになりました。これが、実際小学校5年生にあがる少し前くらいだったのですけども、これも先ほどご紹介いただいた中にありましたが、10歳でヴァイオリンを始めるということは遅いスタートということになります。大体5、6歳、早いと3歳、2歳で始めるという方も中にはいらっしゃるようですけれども、10歳で始めるというのは極めて遅い。私の父はヴァイオリンを仕事としてやっておりましたので、そのあたりの事情というのはよく分かっていた。そうした中で、今から考えるとよくヴァイオリンを始めさせようと思ったなと思うところもあるんですけども、なぜ早くから始めたほうがいいのかというのは音感ですね。よく皆さん、絶対音感なんていう言葉を聞かれることがあるかなと思います。音楽家である私からするとですね、絶対音感というものが必ず必要なのかと言われると、必ずしもそうとは言えないところも感じるのです。一般の音楽に携わってらっしゃらない方からすると、絶対音感があるのが当たり前だろうという風に、音楽家は絶対音感が必ずあるものだと思っておられるようです。必ずしもそうとは限らないですね。ただ私の場合は一応その絶対音感というものが備わっていました。ヴァイオリンを始めた段階で、それはおそらく私の父が家でヴァイオリンを自分で練習したり、あるいは生徒を教えたりしている姿を見て聞いていたこと。自分がその楽器を手にしないまでも、そうした姿に触れていたということが、大きかったのかな。家庭の環境というものは、子どもにとっても、自分にとってはヴァイオリンを、

父親が弾いたり教えたりしているのは日常の風景。もしかすると、どこの家でもそうした光景があるものと、子どもだった自分は認識していたのかもしれませんが。そうした自然の風景として触れていたことは、環境というものは大きな、影響を子どもに与えるのだなど、今振りかえってみると感じさせられます。家庭の環境もあってスムーズにヴァイオリンの世界に入っていくことが出来たように思います。ヴァイオリンという楽器はですね、実際にヴァイオリンをお弾きになった方が皆さんの中にいらっしゃるかは分かりませんが、どこか不自然な構えをして持つところがあります。ピアノやチェロのように自然に楽器をかまえるというのではなくて、少し肩を持ち上げた状態で、首を傾けて、例えていうならば地球の重力に逆らった持ち方をするとところがあるので、初心者の方にとって楽器を持つこと自体が難しい。そして楽器を持ってスムーズに音を出すのが難しい、そうした楽器というところがあるのですけども、私はその辺りもスムーズに初めから出来た。これもそうした環境の中で自分が育ったということが大きな要因だったのだろうと。つまり、ヴァイオリンという楽器はどのような物で、どうやって持って、どのように音を出すのか、自分がその楽器を手にしないうまでも、何となく知っていたということだったのかなと思います。そして、スムーズにヴァイオリンの世界に入っていたのですけども、来る日も来る日も練習を重ねる、そうした日が始まりました。その日を境にですね、自分の人生、歩む道というのは、それまでと全く違うものになったと思います。私は今年で48歳になるのですけども、目を悪くしたのが8歳の時、そこから数えると40年近く、ヴァイオリンを始めてから37、8年といったところなのです。目を悪くした頃、ヴァイオリンを始めた頃、このあたりから自分のある意味において第二の人生というか、新しい人生が始まったということが言えるのかなと思います。

ヴァイオリンを来る日も来る日も弾くという生活が始まって、それまでの、「目を悪くしてどうしよう」「なんで目を悪くしてしまったのか」というところからくる家の中の重たい空気というものが、霧が晴れるように一変しました。私もですね、毎日楽しく希望をもってヴァイオリンと向き合う。そうしたことが出来るようになりました。私の家族、両親もですね、気持ちが前向きになって、毎日目標を持って生活が出来るようになったのかなと思います。どうしてそこまで変わったのかなと振り返ってみますと、毎日毎日の出来事は、大きなことではなかったと思います。毎日学校から帰るとヴァイオリンを持って自分の部屋で練習を重ねる。ヴァイオリンという楽器は、長時間の練習を必要とします。そして、その長時間の練習を毎日続けることで、ほんの少しずつ上達していきます。そのわずかな進歩に、とても大きな喜びを見出していた日々だったのかなと、今振り返ってみると思います。

例えば、今日この曲のここまで弾けるようになった、明日はその少し先まで弾けるように頑張ろう、今日できなかった難しい技術が次の日には少し出来るようになった、さらにその次の日にはもう少し上手に出来るように頑張ろう、そうした日々の目標が、これが明確になっていったとそうのように思います。これがヴァイオリンと出合って私と私の家族が初めて音楽に救われたことだったのかなと思います。そうした生活が日々続いていきました。3年4年くらい続いたでしょうか。だんだん、そうした日々というのは、ヴァイオリンを続けていくということは、ヴァイオリンに限らないことですが、難しい所も必ず出てくるもので、当初ただ楽しいという気持ちで弾いていたヴァイオリンも、徐々に難しい側面が出てきました。例えば、先生から与えられる課題、こればだんだん難しいものになっていく。そうするとすぐには弾きこなせない。さらに練習を重ねるわけですけど、それでもなかなか弾きこなせないで、よくレッスンに通うと怒られて、そ

うしたことが増えてきまして、それまでただ楽しいという気持ちだけでやっていたヴァイオリンがだんだん楽しいものではなくなってくる、そうした時代が中学生から高校生にかけてありました。それでも、日々練習は続けているのですけれども、なかなか当初のようにヴァイオリンを始めた初期の頃のように上達していかない。時には、今まで出来たことが出来なくなってしまうこともあったり。そうなることでですね、だんだんヴァイオリンから気持ちが離れてしまってヴァイオリンを始めて本当によかったのかなとか、練習しなければいけないのだけでも、あまり、ヴァイオリンに気持ちが向いていない。目を悪くしなかったらヴァイオリンをしないですんだのだけでも。そんなことを思う時がありました。振り返ってみると、おそらく必要であり、通らなければならない道だったのかなと、そのようにも思います。ただ、その当時は、その渦中にいるわけですから自分としては非常に悩ましい苦しい時代だったと思います。それでもヴァイオリンを辞めることなく、諦めることなく、続けてこられたということ、これは1つには環境、両親のサポートというものがとても大きかった。そしてもう1つは自分自身もヴァイオリンを初めて手にした時、とても嬉しかった。その時の気持ち、ヴァイオリンを始めた当初の気持ちを思い出すと、また弾いてみよう、頑張れば乗り越えられる。結論的には、そう簡単には乗り越えられたものではなかったのですが、やはり、音楽が好きである、ヴァイオリンが好きであるという気持ちが自分を支えてくれた、そのように思います。

私は中学、高校、大学まで、日本でヴァイオリンの勉強をしました。一般の大学と違って、音楽の大学を卒業するとですね、就職というのはなかなか無い。中にはオーケストラに入ったりとか、そうしたところで就職をしていくという仲間もいることはいるのですけれども、音大を卒業するとそのまま留学という形で勉強を続けるというのが、我々の世界では一般的にあります。そもそも私は視力の問題がありますので、普通に楽譜を見ることが出来ない。それがあがるゆえに、オーケストラに入ってオーケストラの一員として来る日も来る日もいろいろな楽譜を渡されて、それを弾いていく、オーケストラプレイヤーになる選択肢は、初めから無かった。ヴァイオリンを始めた段階からそれは無かったですね。唯一可能なのが、楽譜を見ずに演奏するソリストになるという、ソリストになれる確率ってどれぐらいあるのかって、極めて低い0.何パーセントという確率だったかと思うのですけど。そうしたことを踏まえたうえで、よく両親が私にヴァイオリンを与えてくれたなというふうに、今から振りかえってみると思う所もあります。幸いにして、今こうして活動させていただいておりますので。それも0.何パーセントの可能性があるのであればその可能性にかけてみようということだったと、後に聞いております。今となってみるとヴァイオリンと出会えたこと、ヴァイオリンを与えられたことが良かったのかなと思います。自分にデビューの機会が訪れるまでは、なかなかそうした気持ちにはなれなかったのも、事実であったように思います。

私が日本で大学を卒業しまして、仲間は留学する人も数多くいたのですけれども、私の場合はここでも視力の問題が出でまいりまして、1人で慣れない土地で視力の問題を抱えながら生活をするのが可能なのか。そこまでして留学することはないのではないか、という周りからの声もありました。両親いわく視力が悪いから留学出来なかったということにはさせたくなくて、母親が付き添う形で留学という道を選んでくれたというように言った方が良いのかもしれませんが。大学を卒業した秋から、イギリス、ロンドンの王立音楽院で勉強することになりました。3年ほど学生生活を続けまして、私の音楽、演奏が変わってきたと、周囲の方に言われるようになりました。自分自身は日々弾いて

いるので変化を感じるのは逆に難しかったりします。例えて言うならば、日々子どもに接している親が自分の子どもの成長、身体的な成長ですね。背が伸びていくとかそうしたことがわかりづらい。たまに会った人の方が違いに気づく。時々私の演奏を聴く人の方が、その時その時の変化に気付くようなことがあったようです。音楽が変わっていった要因がどこにあるのか。日本であってもイギリスであっても、日々楽器を持って自分で練習をする、音楽の練習というのは基本的に個人練習になりますので、個人個人が自分のやり方で練習するので、日本であってもイギリスであっても、あるいは他の所に留学しようとも変わらない。ただ結果的にステージ上で出てくる音楽というものは確実に変わっていった。これも環境からくる影響が大きかった、今振り返ってみるとそのように思います。

私の師匠はフランス人だったのですが、その先生のクラスにはイギリス人の友人もいれば、他のヨーロッパ諸国やアメリカやアジア、アフリカ大陸から来た仲間なんかも数多くいました。それぞれが違ったバックグラウンド、違った背景をもって育ってきている、そうした仲間を数多くもつことができたこと。例えば何か1つの作品、1つの楽曲、1つの演奏、クラスの誰かの、例えば私の演奏に関してクラスのメンバーでディスカッションをする、そうした時間もあったのですけれどもそれぞれ違った背景をもって育ってきている人たちなので出てくる意見も全く異なるものでした。日本では、比較的同じような背景をもって育ってきているためか、同じような意見、考え方をもちた人が周りに多くいたように思います。例えばある作品はこうした曲だよね、このように表現すべきだよね、だいたい僕の仲間が考えることは多少の違いがあったとしても、共通性がある印象があります。全く違った背景を持った人たちが数多くいたイギリスの学校では、自分はそれまでこれはないだろうとか、これは間違いじゃないか、良くないのじゃないかと思っていた中でも、非常におもしろいユニークな表現や考え方というものがあった、1つのことに対しても様々な角度から考えてみる、いろいろな考え方があって、初めからそれはないと決めてしまっていた自分がいたということにも気付かされた、そうした経験を数多くしたように思います。そうした経験を積み重ねることによって私自身の持つ考え方、視野というものが、何倍にも広げられたと思います。そうした経験を踏むことで演奏も変化していったということなのかなと、振り返ってみると感じます。

イギリスの学校で3年ほど学生生活を行った後に、東京のサントリーホールでデビューという機会をいただきました。20年以上前のことになります。今振り返ってみても昨日のこのように思い出すことが出来ます。非常に大きな重圧を背負って、ステージに立ったなど。ステージに立って緊張する、その部分については今も変わることはないのですけれども、その時の重圧感、プレッシャーというものは今振り返ってみても格別だったかなと。何しろデビューというものは1回しかない、それを非常にいいものにしたい、最善のものにしたいという思いが強かった。当然のことではあるのですけれども、21年前になるのですけれども昨日のこのように思い出すことが出来ます。そのコンサートをきっかけに、私は演奏家としての道を歩ませていただいている。当初は、自分が20年ソリストとして演奏活動を続けることが出来るとは全く考えてはおりませんでした。まずは1年続けてみよう、そして1年たったころに、さらにもう1年続けてみよう、そこからさらにもう1年、3年たったら5年続けたいな、5年続けるとだんだん欲が出てくるんですね。10年目指して頑張ってみよう、10年続けたら次は15年、20年、気づいてみればもう21年目という年に入っています。

今振り返ってみると、目を悪くしたところから自分の音楽家としての道が始まってい

ますので、非常に複雑な思いが正直あります。目を悪くしなかったらどうだったのだろう。しかし、これも自分に与えられた運命、自分に与えられた人生だったのかなと、この頃では感じられるようになってきていると思います。演奏するという事は、今日うまくいったから明日もうまくいくとは全く限らないので、日々の練習というものも欠かせませんし、もっといえば、日々自分がどのようなことを考えてどのような生活を送っているか、それが楽器を持っている時に限らず、それがどのような環境で生活しているかとか、そこから何を学び取っているのかとか、そうしたものが全てステージの上で出る。それは自分が望む望まないではなくて出てしまう側面があります。私にとっては、ヴァイオリンを弾くというのは10歳で初めて楽器を手にして以来、それは、日常の当たり前のことになっています。ですから楽器を持って日々練習する、ステージで演奏するという事を含めて、このところの日常になっていますし、楽器を持っていない時でも、体のどこか心のどこかで、次の演奏のことについて考えている自分がある、1日24時間、1年365日消えることはないと思います。ヴァイオリンを弾くということが、自分自身とほぼイコールになってしまっているということなのですけど。また、そうした生活を、よくよく考えてみるとヴァイオリンを始めた時から私自身も望んでいたことでもありますし、そうした生活をたくさんの方々の支えによって今も続けられているということ、そのことに感謝の気持ちを持ちながら、私自身は音楽家として、1人でも多くの方に音楽の素晴らしさというものを伝えていけるように頑張っていきたいな、というふうに思います。

私の話にここまで耳を傾けていただき、本当にありがとうございます。

ここからは、ヴァイオリンの演奏の方を聞いていただけたらと思います。本日は、ありがとうございます。

<独奏> 演奏曲 ・J. S バッハ 「無伴奏ヴァイオリン・パルティータ
第3楽章第3番ホ長調ガヴォット V1006」
・H. マンシーニ ムーンリバー「ティファニーで朝食を」
(映画より)